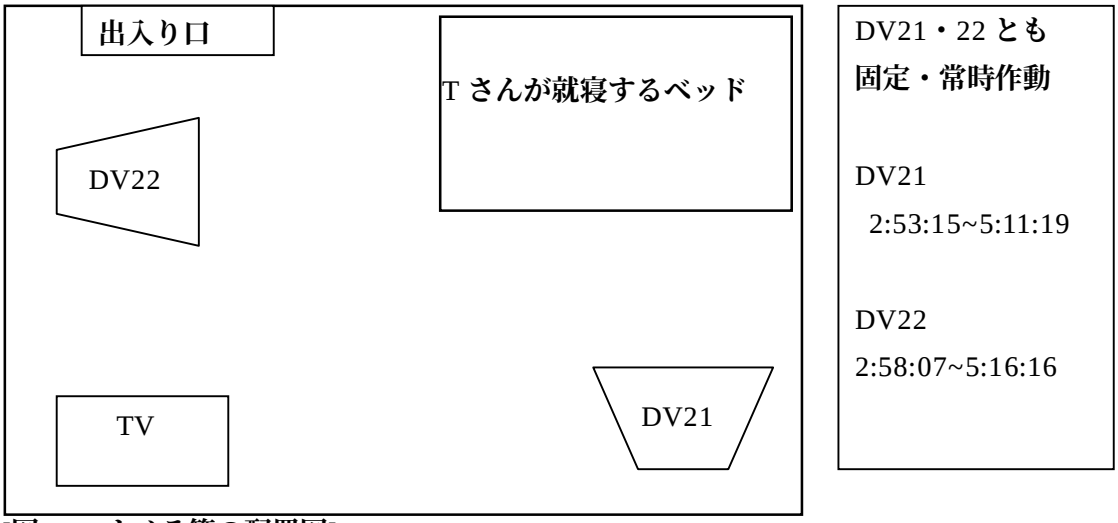
第１章　食事介助の相互行為分析
――在宅パーキンソン病患者の場合――

豊崎玲子(A 班)
藤田千晶(A 班)
渡邊ひかる(A 班)

1. 調査概要

本章では、ヘルパーによる食事介助場面を、エスノメソドロジー・会話分析の立場から分析する。まず、調査の概要を以下にまとめる。

[日時]　2011 年 6 月 29 日
[機材]　HDD カメラ 2 台、IC レコーダー1 台
[被撮影者]　T(療養者)、ヘルパー1 名
[撮影場面]　ヘルパーが食事・歯磨きの介助をしている場面



[図 1：　カメラ等の配置図]

[T さんの特徴]

療養者(被医療提供者)である T さんの年齢は 67 歳。T さんには 73 歳の夫と息子(別居)・娘(同居)が 1 人ずついる。T さん宅での T さんへの介護・看護は基本的に夫の役目であり、療養室は 1 階のキッチン脇の部屋となっている。人が言っていることはおそらく理解しているが、会話でのコミュニケーションはできない。

約 30 年ほど前に歩き方がおかしいとの指摘から､T さんのパーキンソン病が発見される。手術後は歩けていたため、ちょこちょこ歩いたり家事の手伝いをしていたが、6・7 年ほど前に腰を複雑骨折してからは歩けなくなってしまい、ベッド生活を送っている。

[T さんの介護・看護生活]

・週 4 回(月・火・水・金)はヘルパーが来る
・週 2 回(木・土)はデイサービスに行く
　食事・入浴・口内そうじ
・毎日の朝食・木曜の晩ご飯・日曜の 3 食は夫
　食事は具を小さくくだいて食べさせる(歯がきちんとそろっていないため)
・ベッドはエアマットを使用
・介護等級 5 級
・障害者等級 1 級

[在宅介護日誌 H]

・介護記録ノートで市役所が渡している。
・T さん宅ではこのノートに、昼食・夕食の献立、体温・血圧・脈拍、ケアの内容などを、看護師、ヘルパーの方が記録している。
・T さん宅には、ヘルパーや看護師などが携わっているが、特別なひきつぎ事項は書かれていない。

2. 分析方法と視点

この調査は、エスノメソドロジー（EM）研究に沿って分析を行っている。エスノメソドロジー研究について岡田は、「それぞれの場面に可視性を与える(人や物、言葉や道具といった)リソースとその実際の利用法を、実践に即して、丹念に記述していく社会学として誕生した。」(岡田 2007:58)と述べている。また、「振る舞いの秩序を、それが埋め込まれている場面と一緒に、ひとかたまりのものとして特定化していく(その詳細をつまびらかにする)EM の手順は『再・特定化』(respecification)」(Garfinkel 2002)(岡田,2007:65)と言われる。

私たちA班が分析を行うのは、約 30 年ほど前にパーキンソン病を患い、現在在宅で寝たきりの生活を送っている T さんに、ヘルパーの A さんが食事介助を行う場面である。本稿では、A さんと T さんによる「ごはんを食べる(T さん)－食べさせる(A さん)」という課題を軸に、どのような秩序があるのかということに注目して分析を行った。一言で食事介助場面と言っても、ここでは、T さんは小食且つ一口を食べる(飲み込む)ことに通常の場合より時間を要する、T さんは発話によるコミュニケーションをすることが困難である、A さんにはヘルパーとしての時間的制約がある、等の条件が存在している。岡田は、「秩序があるということは、それぞれの状況において、場面が組織されていて、お互いの振る舞いが安定し、協調しているということです。」(岡田 2007:58)と述べている。さらに岡田は、「人や物の配置や言葉や道具の使われかたが組織されることによって、その場面にいる人びとに

物事の見通しが与えられるということが秩序を可能にしています。」(岡田 2007:58)と言及している。

T さんと A さんが持つそれぞれの志向性を考察し、秩序として捉えられるようにするのがこの調査の目的である。

3．食事場面の概要

食事介助はどのように遂行されているか。

「Tさんにごはんを食べさせる」ということは、ヘルパーの A さんにとって「成し遂げなければならない業務」となっている。つまり、A さんにとっての「課題」である。では、この「ごはんを食べさせる」という「課題」はどのように遂行されていったのか。ここでは、この点に注目して分析を進めていきたい。

食事場面(薬に移るまで)は、16:01:38~16:41:12 の間である。この間、A さんがごはんを食べさせようと T さんの口にスプーンを運んだ回数が 83 回、それに対して T さんが食事を口に運んだ回数は 13 回とかなりの差がある。スプーンを口に運んだ回数と食べた回数の合致率はそれぞれ 5 回目までは 100%で行われている。ばらつきが見られ始めたのは、16:07:19 の 6 回目のスプーンを口に運んだ時からで、これ以降、明らかに T さんの食べる速度は遅くなり、よそ見をすることも多くなってきた。また、A さんの食べさせ方にも変化が見られるようになる。それは、16:17:45 の 40 回目にスプーンを口に運んだ時で、それまでは T さんが食べる気配がなければすぐに口からスプーンを離していたのが、この時は 16:18:08 までの 23 秒間もの間スプーンを T さんの口にあてがったままの状況を維持していたのだ。これ以降、A さんは声かけをしながらスプーンを口にしばらくあてがっていたり、短い間にスプーンをあてがう・離すを繰り返したりと、序盤よりもかなり積極的に A さんに食事を促すようになってきた。

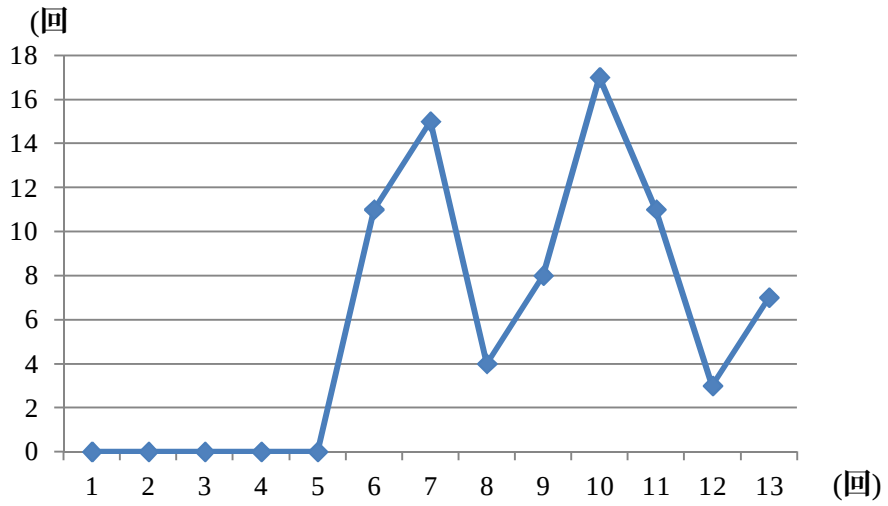


図2：一口ごとに要したスプーンをあてがう回数

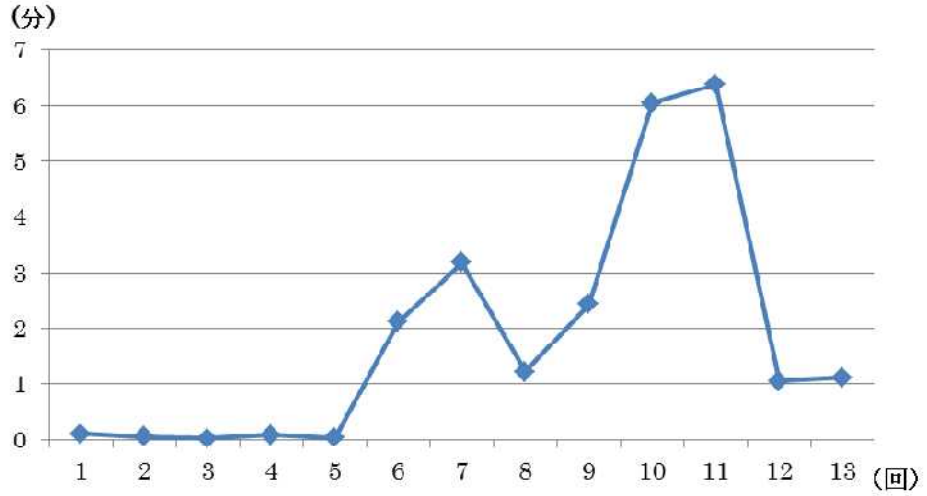


図３：Ｔさんの一口ごとにかかった時間
（Ａさんがスプーンを口にあてがってからの計測時間）

3 - 1．促し

食事の後半になるにつれて T さんの食べるペースは明らかに遅くなっている。この課題に対して、A さんはどのような対処をしているのだろうか。ここでは、A さんが行う、T さんへの食事の促し方について分析していく。

[食事場面 1：T さん食べない場合]

DV21vol.21　16:26:10~16:26:55

DV22vol.22　16:29:43~16:30:28

((45 秒間の T の視線))

A,,Left,,,,A,,,,,,,,,,,,,,,,,,下,,,,,A,,,,,,,,,Left,,,,,,TV[1]

16:26:11　01 A:[はい、　　ん::

02 A:[((T の顔を覗き込む))　((元の姿勢に戻る))

26:16　03 A: ((スプーンを口に持っていく))

04 A:　ね::いりませんか?(0.3)もういらんの::?

26:20　05A:((スプーンを口から離す))

26:21　06 A:もうちょっと食べませんか?

26:23　07 A:((スプーンを口に持っていく))

26:24　08 A:お腹すくよ:::?(1.0)ね

26:35　09 A: ((スプーンを口から離す))

26:38　10 A:いりませんか:::?((スプーンを口に持っていく))

26:42　11 A:食べますか?(1.0)食べましょう

26:48　12 T: ((顔を左に背ける。食べる気配無し))

[食事場面 2：T さん食べた場合]

DV21vol.20　16:33:05~16:33:58

DV22vol.19　16:36:38~16:37:31

((53 秒間の T の視線))

TV,,,A,,,,,,,,,,スプーン,,,,,,A,,,,,,,,,,,,,,Left,,TV,,,,A,,,,,,下,,,Left,,下,,,Left[2]

16:33:06　01 A:ん:::((T の顔を覗き込む))
33:09　02 A:ん:::((T の顔を覗き込む))
33:12　03 A:↑もうちょっと食べれんかな;？
33:14　04 A:もうちょっと食べれません?
33:17　05 T:((うなずく))
33:18　06 A:hh
33:20　07 A:はい、頑張ろう、頑張って:頑張って(0.3)頑張って(h):
33:35　08 A:((スプーンを口に持っていく))
　　09 A:　T さんあ::って、あ::ってあけてくれたら.入れれるけん hh
33:40　10 A:どう?(1.0)どう?[hh
33:43　11 T:　　[((首を左右に振って食べる気配無し))
33:50　12 A:((スプーンを口に持っていく))
　　13 A:　(スプーンが)歯に当たるけん(.)T さんあ::ん(.)そうそう頑張って[あ::ん
33:55　14 T:　　[食べる

1 と 2 は視線のうち、「,」は 1 秒を表している。

〇考察

まず、食事場面 1 の「もうちょっと食べませんか?(6 行目)に注目してほしい。相手に問いをする時、「～しませんか?」というのはその行為をしないことが前提とされた言い方である。それにも関わらず、この食事介助の場面で A さんは、「もうちょっと食べれません?(食

事場面 2：4 行目)というように、T さんが食べないことを前提とするような言い方を使用している。

Boyd らは自身の著書において、喫煙者に喫煙しているということを確かめるためには、「あなたはタバコを吸いませんね?」と聞くよりも、「あなたはタバコを吸いますか?」と聞く方が効果的であるということを述べている。(Boyd and Heritage 2006) これは、相手にとって言いにくいであろう内容を聞き出すことにつながる。ここで、会話における優先性について触れておきたい。

> 「『質問』が『はい／いいえ』で答えられる質問であれば、『答え』の仕方には『はい』と『いいえ』のふたつの選択肢があることになるでしょう。同様に『依頼』や『誘い』という行為に対しては、『受諾』『拒否』というふたつの選択肢があります。そして、こうした複数の選択肢のあいだには非対称性がある、つまりいずれかの選択肢に優先性があるのです。多くの行為について、相手の行為に対して肯定的に応じることのほうが、否定的に応じることよりも優先的であることが知られています。(Pomerantz 1984) (Sacks 1987) (小宮 2007:149)

さらに小宮は、「一見目的を果たすためにはどちらでもいいようなことでも、私たちはある選択肢を他の選択肢より優先しながら行為することを行っている」(小宮 2007:148)と述べている。つまり、ここで言えることは、質問をする以上、相手から肯定的な答えを得ることが出来るように、優先的な質問をすることが戦略として発話者に求められる、ということだ。

以上のことを踏まえて会話の優先性についてまとめたものが表 1 である。まず「食べますか?」という質問に対しては「はい、食べます」が肯定的に応じているため、優先的だと言える。次に、「食べませんか?」という否定疑問文の形式での質問になると、食べないことが前提となっているため、「はい、食べません」と答えるのが肯定的なのだが、そうすると「食べるという行為」に対して否定的になってしまうため矛盾が生じてしまう。この場合、T さんに食べてもらうための質問であるから、「いいえ、食べます」が優先的であると考えられる。

[表 1：質問と答え]

↓肯定的に応じているため、優先性がある。

	食べる場合	食べない場合
食べますか?	はい、食べます	いいえ、食べません
食べませんか?(否定疑問文)	いいえ、食べます	はい、食べません

また、ここでAさんのこのような言い方から推測されることは、Tさんに対する「配慮」である。Aさんはこれまでの経験や在宅介護日誌Hの情報などから、Tさんの食事の量やペースをよく理解している。食べないことが前提→食べられないことが前提とされた言い方だとすると、「食べたくないのはわかっている。だけど食べてくれませんか?」というAさんからのTさんへの配慮が見い出せる。つまり、「食べませんか?」と聞く方が丁寧で強制の程度が薄い促しということになるのだ。

さらに、食べられないことを前提としていると仮定すると、「食べませんか?」と聞いた時、表1より、[食べない場合]には「はい、食べません」という応答が予測される。これは拒否を表しているが、先ほど述べたように、食べられないことが前提だとすると、Aさんにはあらかじめこのような応答が予測可能である。実際にAさんがこのような反応を予測していたとすると、「はい、食べません」(食べない場合)となるのは許容範囲だということになる。同じ[食べない場合]でも、「食べますか?」という言い方だと、食べることを前提としているため、「いいえ、食べません」という応答は、Aさんにとって期待はずれという結果になってしまう。AさんによるTさんへの配慮の背景には、食べない反応をされてAさん自身が落胆してしまうこと、Tさんがそれにより自分を責めてしまうことを防ぐ、といった何重もの配慮がなされているのではないかと考えられる。まさに、ヘルパーとしてのAさんの技が活かされているのではないだろうか。

ケアワーカーによる自立支援／介助を始める発話について秋谷は、

> 「ケアワーカーは高齢者の動きを観察し、積極的に声かけを行うということが日常的な介護サービスのひとつとされているように、ケアワーカーは自立支援／介助を始めるにあたって、高齢者のニーズを予測し、先回りするかたちで自立支援／介助の申し出を行ったり、あるいは高齢者のニーズを自ら聞きだしたうえで、その申し出を行ったりする。」 (秋谷 2008:58)

と述べている。このことからも、Aさんはヘルパーとして Tさんの状況を把握し、場面に沿った配慮ある言い方を実践しているのと同時に、ヘルパーとしての Aさん―介護される側としての Tさんという相互関係を円滑なものにしていくための技が活かされていると考えられる。

3‐2．エンゲージメント(相互関与)

Tさんがもぐもぐしなくなると、AさんはTさんの頬を触って頑張って口を動かすように促す場面が見られた。頬を触るというのは、全体でもこの2回だけである。

[食事場面3]

DV21vol.21　16:35:54~16:36:13

DV22vol.19　16:39:26~16:39:45

16:35:56　01 A:(頑張って)頑張って[動かしましょね、ね

　　02 A:　　[((T の頬を触る))

　36:01　03 T((もぐもぐする))

〇考察

**　頬を触るという行為は、A さんによる、「T さんの口の中にはまだ食べ物が入っているのをわかっているよ」という示しであると考えられ、ただ言葉で促すよりも 関与度合が強くなった表れである。**

[食事場面 4]

DV21vol.21　16:38:09~16:39:34

DV22vol.22　16:41:43~16:43:06

16:38:09　01 A:食べません;か？
38:12　02 A:へい((スプーンを口に持っていく))
38:20　03 A:あ::んて口開けてくれたらはいるよ T さん。あ::
38:24　04 A:あっ、[あ、そう、あ::ん
38:25　05 T:　　[((口に含む))
　　06 T:((もぐもぐする))
39:25　07 A:((少し前傾して T の様子を伺う))
39:33　08 A:頑張って[口動かしてね:
　　09 A:　　[((T の口元を触る))

○考察

食事場面 3 と同様に、頬を触るのは「T さんの口の中にはまだ食べ物が入っているのをわかっているよ」という示しであると考えられ、ただ言葉で促すよりも関与度合が強くなった表れである。

さらにこの食事場面 4 では、「あ::んて口開けてくれたらはいるよ T さん。あ::」(3 行目)、「あっ、[あ、そう、あ::ん」(4 行目)であるように、A さんは食べさせる時、T さんに口を開けてほしいがために「あ::ん」という発話を用いている。この「あ::ん」は A さんと T さんが一緒に出来る行為であり、食事介助を共同作業という形で捉えることが出来る。これにより、促しの程度は高くなり、強制の程度は低くなるという効果が表れることになる。

4．相互関与

4-1．空間内での相互関与

写真１
食事の場面 1
T **さんを覗き込みながら**
スプーンを差し出す。

写真２
食事の場面２

写真３

K **さんとの会話シーン**

写真４
服薬シーン

T さん、A さんにおいて、ここでの課題は単に食べる・食べさせることではない。

DV21 vol15 16:08:52~16:08:59
DV22 vol14 16:12:25~16:12:32　(写真 1 参照)

16:08:52　01　T:　下,,
16:08:53　02　A:　はい
　　03　A:　((スプーンを T の口元に持っていく))
16:08:54　04　T:　皿,,,,,　　TV,,,
　　05　T:　((口をもぐもぐ動かす))

[食事の終了から薬に移る場面]
DV21 vol22 16:40:35~16:42:45
DV22 vol20 16:44:08~16:46:18　(写真 2・3・4 参照)

16:40:36　01 A:もう無理:::?h
40:48　02 A:(　)入らんかな::?
41:13　03 A:時間が[きたので(.)ちょっと(0.2)お薬いきます hh
　　04 K:　　[はい(ちょっと)ごめんなさいお邪魔してるかなっていう反省も
41:19　05 A:えっ?いえいえいえ
　　06 K:ちょっとお腹いっぱい[かなと
　　07 A:　　[あはは
41:35　08 K:夏は食欲落ちるなんてこともあるんですかね?そういうことは[ないんです
　　09　A:　　[う:::んあの
　　10 K:かね？
　　11 A:　多分ね朝割と食べてるからかもしれませんね::
41:44　12 K:そういう食生活に。
　　13 A:う:::ん=
41:47　14 K:=健康的なんですよね。朝しっかり食べた方が(hh)
41:50　15 A:う::んねえ普段あの朝お父さんが結構食べ(　　)うん( )てあげてたら朝
　　16 A :あんまり食べないみたいですよ朝と夕ね( )う::ん
42:07　17 A:　お父さんの話やと朝はたくさん食べるとおっしゃられてますけど( )やっ
　　18 A:ぱり時間がね夕方は短いんでねお昼から::
42:17　19 K:そうですね[間があまり空いてないし。しかも途中飲んじゃうし。
　　20　A:　　[ねえ(　　)
　　21　A:hhh それだからほぼ食べる日もあるしね::う::ん hhh その日の気分にも

22 A:よるんかな T さんなあ
42:43 23 A:お薬で:::す
42:48 24A:( )やね、まだ::
42:56 25A:はい、お薬、お薬よ::

ある個人の注意や関心の大部分を奪うものが主要関与であり、それは明らかにその時点で行為者のもっとも重要な決定因となるものである。副次的関与とは、主要関与を維持しながら、それを混乱させたりすることなく、それと並行してさり気なく続けることのできる行為である。(Goffman 1963=1980:48)

関与は、いくつかに区別することができる。
・主要関与：ある個人の注意や感心の大部分を奪うもの
・副次的関与：主要関与を維持しながら、並行してさりげなく続けることのできる行為
（例）仕事をしながらの鼻歌、耳を傾けながらの編み物など
・支配的関与：個人に対して義務として課されるもの
・従属的関与：注意を支配的関与にそれほどはらわなくてよい場合にある程度まで、
かかわることのできる行為
※時に義務的関与もあり。一般的に、主要関与は支配的関与であり、
副次的関与は従属的関与であるが、これは決して不変ではない。(Goffman 1963)

この場面での関与について以下のようにあてはまる。
T さん
主要関与：食事
副次的関与：TV を見る
A さん
主要関与：T さんへの食事介助
副次的関与・支配的関与：在宅介護日誌 H への記入

ここで、エンゲージメントとして、薬のスプーンの差し出し方・声掛けをする時の動作が、T さんの身体に合わせて A さんも同時に動くなど、T さんと並行して A さんが行っていることから、A さんに食事や服薬（ヨーグルト）を強制的に促しているのではなく、様子をうかがいながら食べさせていることがわかる。ミューチャルマネジメントのサブソースとして、「お薬で:::す」([食事の終了から薬に移る場面]:23 行目)という言葉を用いて、T さんの習慣的意識（服薬することでパーキンソン病の進行を遅めているという理解）を高めることで、互いのエンゲージメントの度合いを高めているのではないだろうか。（2012.01.13 における発表会にて川島氏・西田氏の助言をまとめたもの）

また、食事中のＴさんは視線が定まらず、食事に集中していない。ここでは、TV を関与シールドとして，食事に関心がないことを示しているのとも取れる。しかし、一生懸命食べようとして、食べられなかったらそれを失敗だと捉えてしまうとすると、失敗のレベルを副次的関与(Ｔさんは食事をしても食べられないから TV を見てみる。)によって軽減できるのではないか？という意思が働いている可能性も考えられる。一方、Ｔさんが、自分でその状況をコントロールしようとしているようにも考えられる。エスノメソドロジーの「待たせる―待たされる」[3]行為の中で、立場の上下を意識しているのではないだろうか。そして、「身体の捻り」（Schegloff 1998）[4]と関連させると、Ｔさんの視線がＡさんから TV や壁に変更していることから、食べさせられる受け身の状況を少なくとも自分でコントロールしたいという意志の表示ではないだろうかと考える。

この空間内で、TV の音は全員同じ内容で同じ音量で聞こえるのに、Ａさんの支配的関与は非常に強く、TV を見ようとしない。在宅介護士日誌Ｈに記入、この時、外出している夫への伝言は、副次的関与だけれども、業務遂行のために義務化しているので支配的関与にもなっている。

注３：施設内の人間関係的秩序を定める方式として「待たせる―待たされる」関係がつかわれる。患者（被収容者）は、施設の者に自らの要求を懇願し、許可されるまで待たなければならない。その過程で患者（被収容者）は「事故の無力化」を実感させられ、立場の上下を思い知らされるというのである。
（『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』第８章「施設で暮らす」より）

注４：上体が捻られるとき、その捻りによって志向がどう配分されているかが分かる。そして、胴が捻られているときと、そのような捻りがないときでは、相互行為の展開が異なる。後者のほうが、やりとりが様々に拡張されがちである。
（『身体の捻り』（Schegloff 1998）より）

4-2．構造化された食事

Ａさんは「もう無理:::?h」「(　)入らんかな::?」とＴさんに確認し、本来ならば当事者であるＴさんのなんらかの反応を得るべきだが、Ｔさんは発話が困難であるためそのやり取りが行われることは見込めない。よって、Ａさんは「時間が[きたので(0.1)ちょっと(0.2)お薬いきます hh」([食事の終了から薬に移る場面]:3 行目)と、時間的制約により食事をストップして薬を飲むことへ移っている。ここでの薬とは、Ｔさんが飲みやすいようにヨーグルトに混ぜられたもので、食事の時よりは摂取しやすそうな様子である。しかし、ヨーグルトは食事の始めからお盆に出されているが、薬が混ぜられているために食事とは見なされて

いない。順序が決定されているのである。ヨーグルトを食べるということは、食事の終了を表していて、ヨーグルトを食べると、もう食事には戻れないというように、構造化されている。

時間的制約と述べたのは、パーキンソン病の場合、服薬のタイミングが決まっており、もし、この順序と時間を逸脱した場合、患者本人の症状が悪化するからである。ここには、担当医師からの指示が介入する。

4-3．食事と服薬の違い

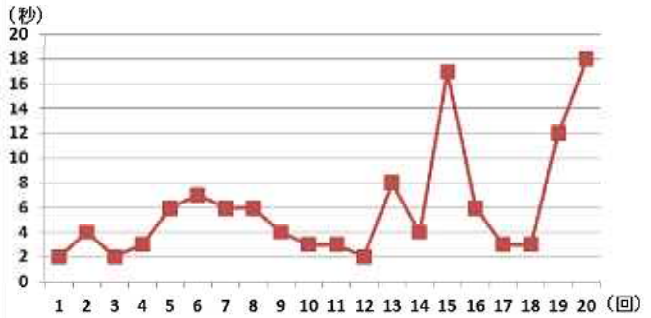


図4：Tさんの一口ごとにかかった時間
（Aさんがスプーンを口にあてがってからの時間）

計測時間
AV06292011_145315.-vol-22
16:42:43～
AV06292011_145315.-vol-23
16:48:43
備考：10 回目と 11 回目の間で
薬を足している。
(AV06292011_145315.-vol-23
16:45:38～49)

「3. 食事場面の概要の図 3」での食事にかかる時間と割合を比較すると、明らかに服薬の方が食べるペースが速く、食事場面より協力的である。薬が混ぜられたヨーグルトは、スプーンを口もとに持っていった 20 回中、16 回食べた。この事実から、やはりここで T さんは“服薬”を意識しているのではないだろうか。食事場面でのスプーンを口に運ぶ回数と、次の一口にかかる時間を比較しても、スムーズさがわかる。ヨーグルトのスプーンを差し出した 1 回目は、「お薬で:::す」([食事の終了から薬に移る場面]: 23 行目)と、A さんによる声掛けが途中より開始された。この時、服薬は失敗で、2 回目は「はい、お薬、お薬よ::」([食事の終了から薬に移る場面]: 25 行目)と言いながらの行動をとっており、成功した。薬という言葉の道具によって、服薬における動機づけを促進させられる。

5．在宅ならではの道具利用と場面の共有

次に、食事・薬を飲む場面以外での、ＴさんとＡさんの相互行為を分析していく。

この場面は、ベッドで横になっている状態から、食事をするために、ＡさんがＴさんの体を起こす場面である。枕を使い、腰の曲がったＴさんの身体のバランスを取っている。

[食事のために体勢を起こす場面]

DV21vol.21　15:59:24~16:01:18

DV22vol.22　16:02:58~16:05:04

15:59:59　01 A:T さん、枕ここ置くけんね
16:00:03　02 A:[((枕を T の腕の下に入れ込む))
　　03 A:[hhh
　　04 ((A と T ほほえみあう))
　00:07　05 A:緊張するな::
　00:11　06 A:T さんはもう慣れっこやな::hhh
　　07 T:((ほほえんでいる))

○考察 1

曲がった背中への負担を軽減するため、枕を 3 つ用いている。そのうちの 1 つは、つかまりやすいようにバナナ型のものを使用している。枕は通常、横になったときに頭を置く道具として使われるが、T さんにとっては体勢を維持するための道具となっている。

○考察 2

T さんは会話でのコミュニケーションは出来ない。この場合は笑いという複数人が同時に行うことの出来る相互行為により、A さんと T さんは場面を共有していると考えられる。

6．促しの失敗

この場面は、食事・薬を飲み終えた後、歯磨きをする場面である。A さんが T さんの歯を磨いた後、洗面器を T さんの口元にあててうがい用の水を含ませるが、T さんはうがいの水を吐き出さずに、そのまま飲み込んでしまう。

[食後の歯磨き時のうがいの場面]

DV21vol.25　16:56:33~16:58:15
DV22vol.23　17:00:07~17:01:45

16:56:39　01 A:T さん飲んじゃうから::頑張って出して
　　02 A:((水を口に含ませる))
56:43　03 A:ぺ:あれっ、え(hh)
56:48　04 A:ぺ:ぺ:ですよぺ、はい
56:50　05 A:出してよ:
56:54　06 A:あ、飲んじゃうやっぱり(h)
57:19　07 A:((T の態勢を整える))
57:20　08 A:よいしょ
57:42　09 A:(顔)あげましょか:
57:47　10 A:((水を口に含ませる))
57:58　11 A:((T の顔を覗き込む))
58:00　12 A:あ、飲んじゃったね
58:03　13 A:飲んでしまってま;す。うん、さんっ、3 回？5 回(0.3)(　)

○考察

1 行目に、「T さん飲んじゃうから;;頑張って出して」とあるように、A さんは、T さんがうがい用の水を飲みこんでしまうことを分かっているが、洗面器を口元にあてて、ちゃん

と水を吐き出すように声かけをしている。A さんが声かけをしているにも関わらず、なぜ T さんは毎回水を飲みこんでしまっているのだろうか。うがい用の水を口に含むと、T さんは首を左に向けている。口をあける様子もなく、水を口に含んだらすぐに飲みこんでしまっているように見える。水を吐き出そうとすれば、口から少しでも水がでてくるようにも思うが、ビデオを見る限り、水が口から垂れていることもないので、T さんは水を吐き出す気はなく、最初から水を吐き出すことをあきらめているようにもみえる。腰の曲がったTさんの体勢では水を吐き出しにくかったり、そもそもTさんは口の中に水をとどめておくことができないのではないか、とも考えらえる。また人は、自分の口の中のものということもあり、うがいの水を飲み込んでも害はないと考え、うがいの水を吐き出さずにそのまま飲み込んでしまう人も多いということ[5]も、Tさんがうがいの水を吐き出さない理由として考えられる。

Aさんは、Tさんに「頑張って出して」(1行目)「出してよ:」(5行目)という声かけの他に、「ぺ:ぺ:ですよぺ、はい」(4行目)という声かけをしている。このような促しがあるにも関わらず、Tさんはうがいの水を飲み込んでしまっているので、Aさんの発話による促しは失敗してしまっているが、「あ、飲んじゃうやっぱり(h)」(6行目)と、うがいの水を飲み込んでしまうことを大きな問題と捉えていないようだ。5

注 5：2012 年 1 月 13 日に行われたデータセッションの場で、当該のデータを見た西田厚子先生（京都橘大学）が口頭で述べた部分を、まとめた部分である。

7．最後に

ここまで、在宅医療における食事介助の場面を中心に分析してきた。一見、ヘルパーのAさんの課題は、「Tさんにごはんを食べさせること」であると考えられた。しかしAさんには食事場面において、無理矢理Tさんに食べさせるような行動は見られなかった。「食べませんか？」という、Tさんが食べられないことを前提とした、強制の程度が低い発話がなされたり、「あーん」というAさん自身も一緒にできる行為で食事を促したりと、丁寧な発話での食事介助が実際には行われていた。発話よりも強制の程度が高い身体接触、つまりAさんがTさんの頬をさわって口を動かすように言う場面が時には見られたが、食べることを強要するかのような不自然な様子もなく、口を動かすことが自然と要求されていた。Aさんはいろいろなパターンの促しを繰り返すことにより、Tさんにごはんを食べさせようとしていた。またAさんは、Tさんの身体の動きに合わせて自分自身の身体をゆらゆらさせたり、のぞきこみながらスプーンを差し出したりと、常にTさんの様子を見ながら食事介助を行っていたことが見てとれた。Aさんは、「Tさんにごはんを食べさせること」という課題を遂行するために、「どうしたら食べさせられるか」ということだけでなく、「どうしたら相互に、(Tさんと)同じことに関与できるか」ということを考え、達成しようとしているようだ。Aさんの、Tさんへの食事介助は、単に「ごはんを食べさせる」といった

ことだけではなく、Ｔさんへの配慮が見られ、もっと洗練されたものであると考えられる。

Ｔさんも、介護を受ける側、というように、常に受け身の姿勢という訳ではなかったように考えられる。Ｔさんは食事の際に壁の方を向いたり、ＴＶを見たりと、食事に集中しているとは言い難い。よってＴＶを関与シールドとすることで、「食事介助をしてくれるＡさんの好意を嫌だと言っている訳ではない」というような、Ａさんへの配慮を表しつつも、自分で受け身の状況をコントロールしようとしているようにみえた。

さらに、Ａさんの、Ｔさんへの食事介助は、食事を終えたら薬を飲む、薬を飲んだらもう食事へは戻れない、というようにまずは、時間的に構造化されていた。そして、この時間的構造化は、部分的に空間的構造化を伴っていた。薬を混ぜることになるヨーグルトは、食事のお皿と一緒に、最初からお盆にのせられている。けれども、他の副食のように、主食と交互に口に運ばれることはない。そういう形で空間的に構造化されていた。食事よりも、ヨーグルトの方が一口ごとにかかった時間もかなり短く、食事に比べるとスムーズに食べていたが、だからといって、口休めにヨーグルトが提供される、ということはなかった。食後に服用することが義務づけられている薬が、中に混ざっているために、ごはんよりも先にヨーグルトを食べることは、許されない行為とされているようであった。ここでは、何か（Ａ）をしたら何か（Ｂ）ができなくなるというような、相互行為秩序が表れていた。食事行為という誰もが行う行為でも、エスノメソドロジー的な視点から分析を行うと相互行為の重なりによって場面が作られているということがわかる。

―謝辞―

日本学術振興会・埼玉大学　川島理恵様、中京大学　堀田裕子様、京都橘大学　西田厚子様、京都橘大学　家根明子様、ご助言ありがとうございました。そして、被写体の患者様、ご家族、スタッフの方々、徳島市医師会訪問看護ステーション　大川由紀様、お忙しいなか、私たちの調査にご協力くださり、まことにありがとうございました。

―参考文献―

秋谷直矩，2008,「高齢者介護施設にみる会話構造―日常生活支援における自／他の会話分析―」,『保険医療社会学論集』，19(2):56-67.

Boyd, Elizabeth and John “Taking the history: questioning during comprehensive history-taking ,” John Heritage and Douglas W. Maynard, *Communication in Medical Care: Interaction between Primary Care Physicians and Patients*, New York, Cambridge University Press, 151-184.

Goffman, –Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press(=1980,丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造一新しい日

常行動論を求めて』,誠信書房.)

Sacks, Harvey Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson, 1974, “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation,” Language,50(4):696-735(=2010, 西阪仰訳『会話分析基本論文―順番交代と修復の組織』,世界思想社.

串田秀也・好井裕明編, 2010,『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』, 世界思想社.

小宮友根、2007、「6 章」前田泰樹・水川喜文・岡田光弘『エスノメソドロジー　人びとの実践から学ぶ』新曜社、124-154

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘, 2007,『エスノメソドロジー　人びとの実践から学ぶ』新曜社.

Pomerantz, A. M., 1984, “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of　Preferred/Dispreferred Turn Shapes,” Aktkinson, J. M. and J.C. Heritage (eds.), *Structures of Action: Studies in Conversation Analysis,* Cambridge: Cambrigde University Press, 57-101,.

Sacks, H., 1987, “On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation, ” G. Button and J. R. E. Lee (eds.), *Talk and Social Organisation,* Clevedon, UK Multilingual Matters,34-69.

Schegloff, E.A. 1998 “Body Torque,”Social Research 65(5): 535-596.

Schegloff,Emanuel & Harvey Sacks , 1972 , Opening up Closings , Semiotica , 7 : 289 – 327 (= 1989,北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」G.サーサス・H.ガーフィンケル・H.サックス・E. シェグロフ著　北澤裕・西阪仰訳『日常性の解剖学―知と会話』,マルジュ社 175-241.)